

パンツいっちょのこげちゃ
びん

おかもところおいち

こげちゃびんの家は、小学校へ行く途中、くじら公園の前にありました。その日の朝も、小学校から一番遠い乾物屋のヒロシ君が、牛乳屋のヤスオ君を誘い、二人がケーキ屋のトシ君を誘い、三人はそろって小学校へ登校していました。昨日見たお笑い番組の話で盛り上がっていると、くじら公園が見えてきて、こげちゃびんの前にはさしかかりました。

こげちゃびんは、くじら公園の前の、練炭の煤で真っ黒になった、今にも潰れそうな家に住む一人暮らしのおじいさんのあだ名。いつも大きめのパンツをはいていて、上半身ははだか。年中そんな姿で家の前でまきを割ったり、七輪でごはんを炊いたりしていましたから、全身真っ黒に日焼けしていました。おまけに、頭には髪の毛が一本もありません。なので、周りのみんなから「パンツいっちょのこげちゃびん」と呼ばれていました。

こげちゃびんの前では、これから朝ごはんをつくるのか、使い古された真っ黒な七輪に新聞紙が突っ込まれていて、白い煙が立ちのぼっていました。建てつけの悪そうな玄関の引き戸は、少しかたむいて開いていて、薄暗い家の中がぼんやり見えましました。三人は、黙って互いをつつき合ってその場に立ち止まり、そおとこげちゃびんの家を盗み見していました。天井からぶら下がった裸電球が、部屋の中をぼんやり照らしていました。部屋の中には、どうやって集めたのか古新聞が壁高く積まれているのが見えます。そして、大きな黒い影が動いたと思ったら、電球が大きく揺れて、部屋の様子もぐらぐら動きました。（こげちゃび

んが中にいるんだ)と誰もが思ったその瞬間、黒光りした頭が玄関からぬうっと現れ、手に斧を持ったこげちゃびんがのしのしと出てきました。

トシ君が「ひい」と、のどから変な音を出して、ヤスオ君が「うぐあ」と、これも言葉というより悲鳴を上げ、最後にヒロシ君が「にげろっ」といったときには、みんな一斉にかけ出していました。

玄関から出てきたこげちゃびんは、走り去る三人の後姿をしばらく見ていましたが、斧を持った手で鼻の下をこするとその場にしゃがみ、転がったまきを割り始めました。

それから、しばらくたったある日の学校帰り。ヤスオ君とヒロシ君とトシ君は、くじら公園で野球をしようということになりました。ランドセルを滑り台の下に置いて、ヤスオ君とヒロシ君は、靴のつま先でベースを描き、学校から一番家が近いトシ君が、家からゴムボールとプラスチックバットを持ってきました。じゃんけんで攻守を決めて、いよいよゲームが始まりました。一人が投げて、一人が打って、一人が守る。ランナーが出たら、バッターがいなくなりますから、透明ランナーも登場します。

ヤスオ君は投げるのが上手でした。ヒロシ君は打つのが得意でした。トシ君はというと、守るのが好きでした。足が速かったので、どんなフライも追いついて取る自信がありました。三人はそれぞれ、自分の得意のポジションで汗びっしょりになって遊んでいました。

日が暮れかかって、『旭ポリスライダー』という会社の屋上

の看板が灯ったので、そろそろみんなの帰る時間です。

「『旭』が点いたから最終回な」

ヒロシ君がバットをびゅんびゅん振り回してそう言いました。

「オッケー、じゃあもう一個アウトになったら終わりな」

ヤスオ君も腕をびゅんびゅん振り回し、大きく振りかぶりましました。

「ダルビッシュ、最後はまっすぐで勝負だー」と、ヤスオ君が野球中継のまねをしながら、思い切りボールを投げました。ヒロシ君も思い切りバットを振りました。「バコ」とバットがボールをとらえると、ボールはすごい勢いで飛んでいきました。

「ホームランやろ」「まじでえ」とピッチャーとバッターは同時に叫びました。ボールはトシ君の頭の上をどかーんと越えていきました。さすがのトシ君もこれには追いつけません。

ボールを追いかけてながら、目の前にせまるこげちゃびんの家が視界に入ると、トシ君はいやな予感がしました。ボールは公園の中で一度大きくバウンドすると、コンクリートの囲いを超え、道路でさらにもう一度弾み、なんとこげちゃびんの家の中へ入っていったのです。

「うげえ」

それを見たたん、トシ君は全身の力が抜けたように腕をぱらんぱらんさせて、ボールを追いかけるのをやめました。振り返ると、ヒロシ君は手を振りながら「さよならーさよならー」と楽しそうに走りまわっていました。

「ハイ、打った人がとりにいくー」とトシ君が言うと、ヒロシ

君は、

「どしたん、早くボール取ってこいや、ゲームセットやで」と答えました。

「ボールがこげちゃびんちに入ったもん」

「じゃあもうボールもさーよーなーらー」と、ヤスオ君は頭の上で腕をぐるぐる回していました。

トシ君には、「ボールもさよなら」ではすみません。これまでに二個もなくして、おとうさんにひどくしかられたこと。買ってもらえないから、少ないお小遣いをやりくりして買ったこと。買ってまだ一週間もたっていないこと。いろんなことを考えて、結局、こげちゃびんちに取りに行くことにしました。ヤスオ君とヒロシ君は、塾や家の用事を思い出したそうで、先に帰ってしまいました。

「あのお」

こげちゃびんの家の前に立って、声をかけてみましたが、返答がありません。じわりと近寄って、もう一度声をかけようと大きく息を吸うと、湿った空気の中に煮魚のような臭いが混じっていました。

「すみませ」といい終わらないうちに、中から、

「なんやお客さんか」という声がして、パンツいっちょのこげちゃびんが出てきました。

トシ君は、はじめて間近に見るこげちゃびんに圧倒されましたが、

「あのお、ボールが転がって、で、そのお、その柵をこえてえ、ほんで、転がってあの、あ、別に入れようと思ったわけではなく…」と早口でそこまで話しました。

「黄色いボールか、さっき転がってきたやっちゃん、ちょっと待って」といって

こげちゃびんはそう言うと、薄暗い家の中へ入っていきました。

(ふう。なんかこっちの話が通じたみたいやな。思っていたよな、どつかれそうな雰囲気とはちがうからよかったな)

トシ君がそんなことを考えながら待っていると、黄色いゴムボールとブリキのバケツを手にこげちゃびんが戻ってきました。

「さっき転がってきたのはこれや」そう言ってこげちゃびんは、黄色いゴムボールをトシ君に投げました。胸の前で両手でキャッチしたトシ君の姿は、お祈りをしているようなかっこうになりました。

こげちゃびんは、色とりどりで大きさもまちまちのボールがいっぱいに入ったブリキのバケツを差し出して、

「それから、これな。その公園で遊んでたんやろけど。なんべんもうちに転がり込んできて、バケツ一杯になっとる。そやけど、誰も取りにきよらん。お金出して買うたのにもったいない話や。ものを大事にせな、ろくな大人になれへん。ほしかったらどれでも持っていき」と言いました。

「いや、ぼくのはこの黄色のやつで。あの、ども」それだけ言うと、トシ君は軽く頭をさげ、走って帰っていきました。

それからというもの、トシ君のこげちゃびんを見る目が変わりました。いままでのようにお化けをみるみたいに怖がったりしませんでしたし、なにより、

（まきを割って、古い道具を使って、それでご飯をつくるこげちゃびんは、ただの貧乏に見えるけど、あれはこげちゃびんの、ものを大事にするやり方なんかな）と思ったりしました。そして、

（またボールがこげちゃびんちに転がっていても、おじけづかずに取りに行こう）と思いました。

おわり